

大学院特別講義

(医歯学先端研究特論)(生命理工学先端研究特論)

(医歯理工学先端研究特論)

下記により大学院特別講義を行いますので、多数ご来聴下さい。

記

1. 講師：山下 秀一郎 先生

(東京歯科大学 口腔健康臨床科学歯科補綴学分野 教授)

2. 演題：短縮歯列のコンセプトとその是非について考察する

3. 日時：平成25年2月18日(月) 18:00~19:30

4. 場所：歯科棟南4階 特別講堂

5. 内容：歯が喪失し欠損が生じた場合、補綴学的にはブリッジ、部分床義歯、あるいはインプラント等を用いて可及的速やかに欠損部を修復することが、主治医の重要な義務であると考えられてきた。一方において、数歯程度の欠損であれば補綴処置が施されずに放置されたままでも、顎機能に特に問題がなく経過した症例が臨床的に認められることも事実である。はたして、すべての欠損に対して確実に迅速な補綴処置が必要であるのか、あるいはそのままの放置が許されるのか、この基準に関しては各臨床医独自の判断に委ねられてきたのがこれまでの現状であろう。

近年、北欧を中心として、歯の欠損、特に後方大臼歯のみの欠損は補綴しない方が良いのではないかという考え方が現れてきた。特に、オランダの Käyser らは1981年以来、一連の臨床論文を発表し、短縮歯列 (SDA: Shortened Dental Arch) の概念を提唱してきた。我が国において、この短縮歯列の概念をそのまま受け入れることが可能かどうかについては、慎重に検討を進める必要がある。そのメリット/ディメリットについて疫学的研究のみならず、生理学的なアプローチが是非ともなされなければならない。日本補綴歯科学会では、2003年度にこの問題に対して初めての臨床シンポジウムを行い、その後も継続的に計3回にわたりこれまでの臨床・研究上の問題点の洗い出しを行うことによって、一定のコンセンサスを得るために活動を進めているところである。症例ごとに補綴的介入に対する適否を熟慮した上で、介入か非介入かを決定するルールの構築されることが望ましい。

本講義では、短縮歯列の概念、その適用、我が国における展開、さらに、演者らの研究成果に関して、咬合支持、下顎位、顎機能障害、主機能部位などのキーワードをもとに解説したい。

【連絡先】 部分床義歯補綴学分野 上野 剛史 (内線 5517)